手作り紙芝居

３月 16 日「広宣流布記念の日」

導入部

３月 16 日は、「広宣流布記念の日」です。第二代会長戸田先生から当時の青年部へ、なかんずく若き日の池田先生へと「広布のバトン」が手渡されたこの日の意義を、学んでいきましょう。

１枚目／青年部の代表が、全国から結集　（７枚目の絵の裏に貼る）

1958 年（昭和33 年）の３月 16 日、男女青年部の代表6000人が集って「広宣流布のバトン」を受け継ぐ式典が開かれました。これは、「将来のために広宣流布の模擬試験、予行演習となる式典をしよう」との第二代会長戸田先生の提案を受け行われたものでした。

２枚目／後継の青年に広宣流布を託す　（１枚目の絵の裏に貼る）

戸田先生は第二代会長に就任した際に、75万世帯の弘教を目標として掲げられました。この目標は、前年にあたる 1957 年（昭和32 年）の暮れ、池田先生を中心とした青年が推進力となって達成されました。

戸田先生はまた、御書の発刊など、成すべきことをすべて成し終えたうえで、後継の青年にすべてを託すべくこの式典を行ったのです。

３枚目／心づくしの豚汁　（２枚目の絵の裏に貼る）

式典当日の早朝、全国各地から続々と到着する 6000名の青年部員たちを待っていたのは、心づくしの「豚汁」でした。「皆に何か温かいものを食べさせてやりたい」との戸田先生の配慮によるものでした。

師の慈愛が、青年たちを温かく包みました。

４枚目／弟子の真心が結晶した車駕　（３枚目の絵の裏に貼る）

当時、戸田先生はすでに衰弱が激しく、支えられなければ歩行も困難な状態でした。そこで体調を心配した池田青年室長（若き日の池田先生）は、師匠が安心して動いていただけるよう、特製の「車駕」を用意しました。『三国志』で有名な諸葛孔明が、五丈原の戦いで四輪の車に乗って指揮をとった故事にならったものでした。

それを見た戸田先生は、当初「大きすぎて、実戦に向かぬ！」と叱咤しました。最後の最後まで、命をふりしぼっての、愛弟子への訓練でした。しかし、式典が始まると、愛弟子の真心に応え、車駕に乗り、悠然と会場に向かいました。

５枚目／病身をおしての、渾身の指揮　（４枚目の絵の裏に貼る）

この式典には、時の首相の参列が予定されていましたが、当日の朝になって、首相から突然、急用で参加できなくなったとの連絡がありました。しかし戸田先生は、「誰が来なくても、青年と大儀式をやろうではないか！」と、病躯をおして渾身の指揮をとられたのです。

６枚目／「創価学会は宗教界の王者」　（５枚目の絵の裏に貼る）

12 時 40 分、池田青年室長の司会で式典が開始され、戸田先生がスピーチをしました。

「われわれには広宣流布を断じてなさねばならぬ使命がある。それを今日、私は君たち青年に託しておきたい。未来は君たちに任せる。頼むぞ、広宣流布を！」

そして、戸田先生は「創価学会は、宗教界の王者であります」と雄々しく宣言されたのです。

７枚目／広布後継の誓願の日――３．16　（６枚目の絵の裏に貼る）

この「３．16」によって、池田先生は師匠から「魂のバトン」を受け継ぎ、広布の大道を開き続けてきました。その死身弘法の闘争によって、今やＳＧＩ（創価学会インタナショナル）は 192 カ国・地域に広がっています。

池田先生は語っています。「師匠に弟子が勝利を誓う。そして必ず勝つ。この『誓願』と『勝利』にこそ、大仏法の血脈は流れ通うのだ」と。（2007 年 10 月全国青年部幹部会へのメッセージ）師匠の万感の期待に、後継の青年が応えゆく誓願の日―――それが３．16「広宣流布記念の日」の意義なのです。

決意等